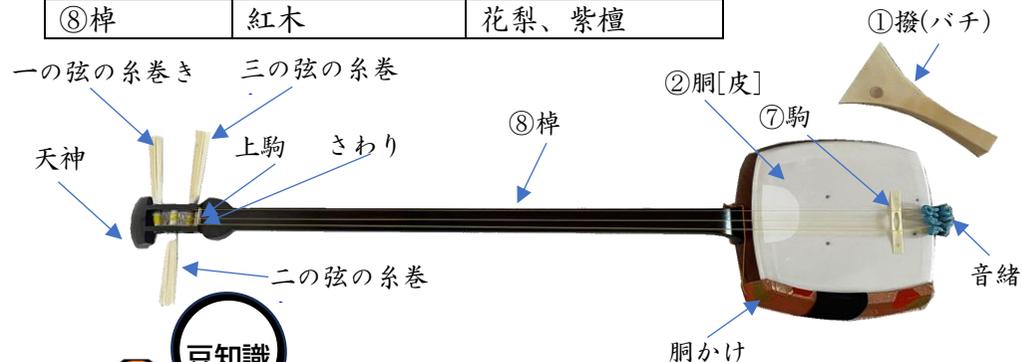


三味線のさわり いの巻
長唄三味線の素材と構造

【長唄三味線の素材】

| | 舞台用 | 稽古用 |
|--------|-----|----------------------|
| ①撥(バチ) | 象牙 | 木 つげ・かし ひいらぎ 等 |
| ②胴[皮] | ネコ | 合成皮革、イヌ カンガルー |
| ③糸 | 絹 | ナイロン |
| ④糸巻き | 象牙 | 木 |
| ⑦駒 | 象牙 | 骨(シャリ) |
| ⑧棹 | 紅木 | 花梨、紫檀 |

木の硬さは
つげ→かし→ひいらぎ
の順に硬くなり、喜鶴社
中では、主に「かし」の撥
(バチ)を使っています。



豆知識

三味線は分解できるんです！



かんべり

ギターやバイオリンと違い、三味線の棹には何も貼っていないため、たくさん弾くと棹の表面が減ってきます。三味線のツボを勘所といい、それが減るから勘所減り、略して「かんべり」といいます。
※三味線は棹が鳴る楽器であり、中に金属がはいっているものもあります。

第1回

杵屋喜鶴アカデミー

寺子屋

第一部 長唄演奏

杵屋 喜鶴花(きねやかかはな)
ひのえ午 開弦一番 『松の翁』
ふきよせ 紀文大尽 『嵐の合方』

杵屋喜鶴アカデミー 寺子屋 第一回は一月(睦月)ということ
で、祝い曲『松の翁』をご披露いたします。
長唄の「松の翁」は、松が持つ「長寿」や「不変」といった縁
起の良い象徴と、歌詞の内容が美しい景色や繁栄を讃えるもの
であるため、唄の演奏会やお座敷などで、繁栄や長寿を祈願す
る祝いの曲として広く上演されています。

第二部 ペンペン寄席

三味線 Henry

漫談響演 『那須与一』

端唄に小唄、琵琶に三線…自由闊達に織りなす邦楽ライブ
今回は琵琶を中心にお届けします。



日時 二〇二六年一月二十四日(土)
場所 文化のみち 榎木館



【本調子】→【二上り】
 二の「糸巻」をあげて調子を整えます。

糸巻

| 調子：二上り | | 調子：本調子 | |
|---|---|---|--|
| <p>～世にも佳境の閑楽 と心残して帰るさ の土産(いへづと) にせよ園の一節</p> | <p>(乱れの合方)</p> | <p>景 四季の眺めも時知 らぬ 雪は芙蓉の峰 つづき 行逢ふ旅の 人毎に 聞き伝へ来 つ名に愛でて 見れ ば珍花に家路を忘れ 筆も尽きせじ庭の絶 景</p> | <p>(拍子の合方)</p> |
| <p>「佳境の閑楽」：景色のよいところ</p> | <p>前半は、三味線では珍しいトレモロで雪が松にかかる冬の庭を表現します。後半は裏拍を弾く人が表拍をどんどん追って加速する躍動感を感じてください。</p> | <p>「四季の眺め」：季節ごとの美しい景色 「時知らぬ雪」：いつも雪が積もっていること 「芙蓉の峰」：富士山の異称 「筆も尽きせじ」：「尽きず」で一語、下に打消の語を伴って「なくなる、尽きる」。「じ」は打消推量の助動詞</p> | <p>三味線二丁がそれぞれ全く違う「手(メロデイ)」を弾きます。今回は、喜多六派では滅多に弾かないおめでたい三番叟仕立に挑戦します。</p> |
| | | <p>上品なメロデイを積み重ね、格式の高さをあらわしています。</p> | <p>(舞の合方)</p> |
| | | <p>「言の葉」：はことば、または和歌 「祝せめ」：「祝す」に勧誘の助動詞</p> | <p>～凡そ千年の鶴は 園生の松樹に葉籠り 又 亀の齢を万樹の 主に比ぶれば 歳も 若木の花の笑み 雨 露の恵みに時を得て 倭唐土(やまともろこ し)各国の 千草万木 おしなべて 皇国(み よ)も開化の花盛り</p> |
| | | <p>翁の気分を表していると言われているます。三味線二丁の呼応が聴かせ処です。</p> | <p>「園生の松樹」：庭園の松 「万樹の主」：庭の主(植松家の当主) 「花の笑み」：花が美しく咲き開くこと 「倭唐土(やまともろこし)」：各国 倭は日本、唐土は中国 「皇国(みよ)」：「御代・御世」と同義</p> |

長唄

松の翁

明治十年(一八七七年)

作曲：三代目 杵屋正治郎
 作詞：三代目 杵屋正治郎

アンケートのお願い



このQRコードを読み込んでアンケートにご協力いただくと幸いです。
 3分ほどで回答できます。

お祝いの曲って他にもあるの??
 お祝いの曲でちょっと手軽なものという
 と、『寿』『鶴亀』『七福神』などがあります。
 さらにちょっと新春や結婚式など格が欲しい
 ときに『松の翁』が選ばれます。
 舞踊でも同様に『寿』『鶴亀』『島の千歳』
 『七福神』などがお祝いの曲です。

えっ??そんなことあるの?
 「松の翁」は、三代目 杵屋正治郎が富士市の「松永
 家」に滞在した折に作られたと言われてきました。
 ところが、最近になって沼津市原にある資産家「植松
 家」で、作曲者の奥付のついた唄本と芳名録の署名が
 見つかり、「松の翁」は、植松家の庭「帯笑園(たいし
 ょうえん)」を唄ったということがわかったんです!